Views from Orienteering

村越 真

昼からの雷雨に見舞われた平標（たいらっぴょう）山山頂にて。雨具ももたずＴシャツだけで歩いている登山者が今でもいる。リスクとそれに備えるという考え方は、まだまだ一般的ではないのかもしれない

夏休み

夏休みは絶対に何もしない 1 週間を作ると誓って、数年来の懸案であった何もしない 1 週間を確保した。この期間に、2 年間にわたり高所登山家からインタビューデータを収集・分析していたリスク対処の論文を仕上げようと決めていたので、まずはそれに集中した。

その合間に山に登り、考察が現実にどう活かせるのかを考えた。また、2 月に発生した芝田さん・砂田さん（いずれも MTB-O の日本代表。芝田さんは MTB-O 委員でもあった）のカヌー事故死の調査をしている田中が訪ねてきて、この事故の教訓について話し合った。

強風が吹き荒れた日に、浦安の海岸で発生した事故で、「慎重な芝やんがなぜ？」と多くの人が不思議がった事故だった。外からはなかなか分からないジレンマが事故につながっているのだという、リスク回避の難しさを実感することができた。これらが仕事なのか趣味の範疇なのかは微妙なところだが、締め切りがないというだけでも、僕にとっては十分な休養だった。

久しぶりののんびりした夏休み。苗場山の麓の赤湯温泉にて。徒歩でしかいけない秘湯で、河原からも丸見えの露天風呂に昼間っから入って、大満足

この休暇中、一つだけ大きな仕事をしてしまった。日本登山界の巨人・山野井泰史さんにインタビューのアポが取れたのだ。分析や論文をまとめる作業の中で、彼や竹内洋岳の話しを聞かなければこの研究は完結しないという思いが強くなっていった。

ほとんどロープも使わず、ソロで 8000m の岩壁に挑み、最後は夫婦そろって 28 本の指を失った山野井さんはいったいリスクについてどう考えているのだろう。それは彼の著作や作家の手になるノンフィクションに垣間見ることができるが、自分の耳でその答えを聞きたいという思いは研究を進めるほどにつのった。

彼の話す内容で、想像を超えるものはなかった。だが、自然環境の中に潜むリスクを見る目の具体性には目を見張った。登山とは全く関係ない子どもの自然体験の図版を見せた時にも、彼は「うーん。みんな危なくない。死なないから」と言い放った。それ以上に興味深かったのは、彼は詳細なイメージ予測に基づき評価を下した点だった。見たばかりの場面でさえ、具体性かつ詳細にリスクの程度をイメージできるところにこそ、彼をリスクのぎりぎりのところに居ながらも、今生きている理由なのだろう。

厳しい山登りと同じく、インタビューも研究者にとっては「生死」に関わる営みである。どんな対象者でも緊張する。まして、並ぶ者のいない世界の第一人者が相手となれば、その緊張はどれほどのものになるのだろうか。最近交感神経が極度に興奮する僕にそれが耐えられるのだろうか。巨峰を前にしたクライマーのように不安は募った。

彼はインタビューの最中、しばしば大きな目をきょろきょろさせながら、答えを探し、真摯に回答してくれた。素晴らしい眺めと課題を提供してくれる山登りのように、インタビューは最初から最後まで楽しかったのだ。それは、大きな驚きだったし、それ自体が山野井さんの人柄の広さを実感させてくれた。彼は、「ソロを危険だと思わないのですか？」という質問に対して、「他の人と登った方が危ない」と答えた。なるほど、彼が僕に対して見せたサービス精神こそが、彼にとって最大のリスクということなのだ。

Navigation, navigation, navigation

ここ 10 年、様々な人を対象にしたナヴィゲーションや読図の講習を行ってきたが、今年度に入って TEAM 阿闍梨で企画しているチャレンジナヴィゲーションはひと味違う。この 10 年に読図講習を受けた人は僕が主たる講師だったものだけでも 1000 人は越えるだろう。それに加えて TEAM 阿闍梨やアドベンチャーディバス（多摩オリエンテーリングの北村ポーリンが主催するアウトドアクラブ）などでの読図講習会でのリピーターも多い。だが、彼らはその先になかなか進めない。読図スキルそのものがアウトドアに重要だというのはもちろんだが、オリエンテーリングに長年取り組んできた僕からすれば、練習の一環としてでもいいからオリエンテーリングに定期的に取り組む人を増やしたいという下心もある。どうしてだろう？

阿闍梨の田島利佳と、何度か話しをするうちに、「やっぱりオリエンテーリング大会の問題なんじゃないだろうか？」「あれじゃあ、はじめての人、なじみにくいよね」という話しになった。現在のオリエンテーリングは競技スポーツとして確立している。規則や慣習を知らない人にはとてもじゃないが敷居が高くて入ってこられない。だいたい、一人で大会にやってきて、競技後にあの体育館でどんな顔して座っていればいいのだろう？

どんな競技スポーツでも、先鋭化すれば、その世界には簡単には入ってこら

れないのだから、このこと自体は別にオリエンテーリングの問題点というわけではない。だがオリエンテーリングでもっとも問題なのは、クラブ組織が十分機能しておらず、競技への入り口をほとんど果たしていないことだ。たとえばテニスの初心者が始める場合、スクールに入ったりコーチについたりするだろう。継続して続けたいと思えばクラブに入る。試合に出るにも、最初のうちは、その先輩たちと一緒に出れば安心だ。初めての大会でも居場所がある。オリエンテーリングではそれが機能していないのだ。じゃあ、クラブ組織を作っちゃおうと、TEAM 阿闍梨で作ったのが「クラブ阿闍梨」。キャッチコピーも「仲間が広がる、ナヴィゲーションの楽しみが深まる」という全くのぱくり。

田島利佳のアウトドア界とのつながりや発信力が大きな役割を果たしたことは間違いないが、それでも、約 20 人のコアなクラブメンバーが集まったのにはびっくりした。トレイルランナーだったり、これから長距離のレースに出るので、ナヴィゲーション力が必須だと考えた人だったり、それぞれに思いはあるようだ。マーケットは決っして大きいとは言えないが、ナヴィゲーションを深めたいと思っている人は確実に存在するのだ。

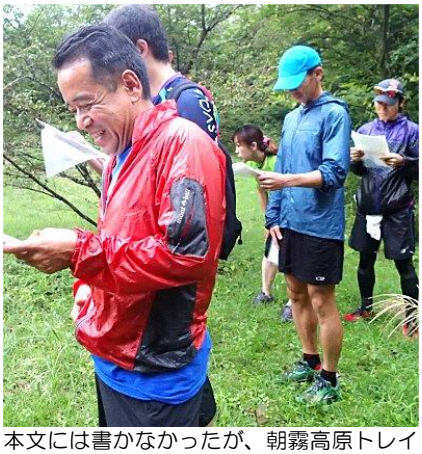
夕暮れの所沢航空公園で、クラブ阿闍梨の野外レクチャーの一コマ。この後参加者は初めてのナイトオリエンテーリングに挑戦。守られた公園だからこそできるのだが、夜遊びの子供のようにおおはしゃぎ

9 月になって静岡消防の読図講習会の講師を務めた。静岡市は 3000m を越える山岳地域を有し、毎年遭難者が跡を絶たない。その救助に出かけるのが警察であり消防なのだ。もっとも本格的な救助隊が出動しない里山でも、一定の遭難があるので、所轄の消防署から救助隊員以外の消防署員も山に出ることがあるという。だから講習も 20 人を越える。地図読みに関してほとんど素人に近い署員もいる。

「先輩、これでっぱっているから尾根っすね！」若い消防隊員も地形が読めて大満足

講習の後半は、彼らに行く先を指示して、先導させた。講師が引っ張るよりも、これが一番いい練習になるのだ。救助隊ではない若い署員が、はっきりしない道のない尾根を下り、ところどころで躊躇しながら、「先輩、これ尾根っすね！」「あ、（コンパス見ると）それてます。あっちのでっぱったのが尾根じゃないっすか？」少しだが読図力があがり、尾根が分かるようになったのをうれしがって、彼らの役割が終わった時も、「ナヴィゲーションっておもしろいっすね！」と大喜び。市民の安全確保のお手伝いをさせてもらった上に、こんなに喜んでもらえて、幸せ。

こうした経験をする度に、オリエンテーリングとナヴィゲーションスポーツには、まだまだ私たちが気づいていない大きくはないが確かなポテンシャルがあるのではないかと思う。



本文には書かなかったが、朝霧高原トレイルランニングレース前日の講習会の様子。数年の努力で、10 人を越えるランナーが参加したが、いずれもトレイルに出る上で読図力は欠かせないと考えた人ばかり。最近は、最初のうちにきちんと学ぼう、と考える人が増えたように感じられる。この日もセンターの敷地という限られたエリアだったが、この笑顔からも、ナヴィゲーションを伝える手応えが感じられるだろう

UTMF の自己責任

2012 年から、富士山を一周する 100 マイルのトレイルレース（UTMF）に関わっている。競技者のレベルも分からず、競技者にしても 100 マイルをどう走ったらよいか分からないレースの中で、救護には安全管理の大きなプレッシャーがかかった。2 回目となる 2013 年のレースは、コースの変更やお互いの慣れやシステムの充実もあって、大きなトラブルもなく運営を終えることができた。

だがリスクという視点から見ると、課題は完全に解決したとは言えない。必須装備が決められ、レース前にはそれをチェックする。しかし、あれほど明確に書いたのに、防水性の低い雨具しか用意していない参加者が少なくない。もっとも、必須装備の一律な指定にも問題がないとは言えない。レースには様々なレベルの人が参加する。常に一定のスピードで走ることができ、身体的なトラブルの可能性が低いトップ選手には防寒具がいらないかもしれない。しかし、完走もおぼつかない参加者は、走れなくなった時の防寒具が間違いなく必要だ。参加者に対して一律の装備を指定することが、むしろ参加者の危機意識を低めているとは言えまいか？

100 マイルのレースともなれば、場所によってはマーキングが十分とは言えない。そんな時も、ある程度は自分でルートを判断できるだけの地図や下見によるコース把握は必要だし、確認するための地図も必携にしてある。だが、十分な地図を持たない人も少なくない。

最後尾でコースアウトした後で、ルートにマーキングがなくなっていると、かなりの剣幕で怒る人もいる。レースが大がかりになり、商業的になれば、こうした参加者にも確固たる姿勢で臨むことも難しい。リスクと隣り合わせの自然の中のスポーツが商業化することの大きなジレンマが、そこにはある。

必須装備の仕様を事細かに説明し、厳格にすることは、私たち主催者のリスクを減らすが、トレラン界全体のリスクを先送りするだけかもしれない。またレース当日、事細かに装備チェックをすることが現場では難しく、結局甘いままで流してしまう事例も出る。それを知った参加者から、不公平だという不満があがる。必須装備の完璧なチェックを目指すことは何もいいことがない。

自分の中でもやもやしていたこの疑問から、「必須装備は最低限にし、雨具や防寒具は推奨とし、内容も自分で考えてもらう」と運営のメーリングリストで提案したら、大論争になってしまった。

UTMF における装備チェック。今回２回目だが、主催者としての安全確保と、参加者の「自立」には常にジレンマを感じる。オリエンテーリングでは水や救急用品は携帯しない。だが、初心者の中には数時間も暑い夏に森の中をさまよう参加者もいる。今のようなリスク対応の体制でいいのだろうか？とは常々疑問に感じる。

当初、この論争に僕はうんざりしていた。展開は目に見えているし、論争相手が現場の感覚に鈍感に思えたからだ。だが、論争中、（たぶん一番こらえ性のない僕も含めて）誰一人感情的になることもなく、淡々と目的：参加者の安全を守ると同時にトレラン界の安全文化を構築する、に向けて何をしたらいいかを考え続けた。その結果、三方一両得のような解決法が出てきた。それは論争当初には誰も想定もしなかった発想の転換でありながら、多くの副次的効果を持つものだった。

その方法とは、参加者自身に装備チェックをさせる方法だった。もちろんこの方法を機能させるにはいくつかの仕掛けが必要だ。まず、装備品のチェックリストを公式に作る必要がある。参加者はこのリストに自分でチェックを入れ、防寒、雨具については、各自でその仕様を書き込む。そして「自分は以下の装備で、本レースのリスクに十分対処できると考えている」旨の署名をさせる。もちろん、レース後のサンプルチェックも必要となる。

チェックリストの自己チェック方式によって、参加者はこれまでの「誰かがチェックしてくれる」意識から、自分でそのリストをチェックし、また自分の装備の仕様を確認する必要が生じる。また、署名をすることで、改めて装備を選び携帯することの責任を意識することができるだろう。もちろん、啓発や情報提供が必要だ。だがこのリスク自体が教育と啓発のツールとなるだろう。主催者の手間は増えるかもしれないが、単なる監視役ではなく安全を守る共同者としての役割がより強くなり、荷物チェックで感じていたかもしれない徒労感は減るだろう。

自己責任という言葉の原点に戻ってシンプルに考えれば、困難だと思っていたことも、結構簡単に解決できることなのかもしれない。

（村越 真）